
書評

D. Steel & F. Guala, *The Philosophy of Social Science Reader* (Routledge, 2011, xiii+442p.)

渡辺一弘

本書は、社会科学の哲学における近年の動向を示すものとして選ばれた全 28 編の重要文献を、七つのトピックに沿って収録したアンソロジーである。社会科学の基礎的概念、あるいは方法論的基礎に対する哲学的分析の歴史は、もちろん浅からぬ伝統を有している。しかし、とりわけ 20 世紀半ばから飛躍的な発展と専門的深化を遂げた英米分析系の科学哲学という文脈においては、社会科学の哲学は一種の傍流、すなわち本流たる自然科学（とりわけ物理学）の哲学の成果を一般化して適用し、その妥当性を補強するための個別的ケースとして見なされがちであった。しかしこの流れのただ中にあっても、そうした本流－傍流の区別の設定が孕む齟齬や緊張関係は意識され続けてきた。そして、自然科学の哲学の背後にこの間も確かに伏在していたそのような意識が、論理実証主義の科学観が内在的に抱える問題点のもとより、その統一的な科学観が実際の科学的営みの多様性に一致しないという事実が認識されるに至って、1980 年以降に起こった社会科学の哲学における劇的な変化を動機付けたのである。

編者のダニエル・スティールとフランシスコ・グアラがこのアンソロジーを出版した意図は、社会科学の哲学におけるこうした新しい流れを読者に示すことにある。そして彼らによれば、この新潮流は次の四つの視点から特徴付けられる。まず先に触れたように、「科学の不統一性(disunity of science)」ないし多様性への認識の高まりは、社会科学を含む科学の現場で実際に行われている研究の具体的な姿が、統一的な図式に収まるようなものではなく、むしろそこでは個々の研究領域に適した方法ないし説明様式が各々の事情に即して採用されているのだ、という事実を注視することによって得られた。しかし他方で、社会科学が自然科学におけるいくつかの特定の方法を現に活用していることもまた重要な事実である。このことは、自然科学と社会科学の区別を強調するにせよ退けるにせよ、そうした対立構造を想定する枠組みの下でなされる議論自体が、アприオリな概念的考察にのみ拠るのではなく、社会諸科学の具体的な文脈と目的に関する詳細な知識によってなされるべきだという研究上の大きな流れを生んだ。この点はさらに、近年の社会科学における「分野横断的研究の興隆(interdisciplinarity)」と哲学における「自然主義(naturalism)」の台頭という二つの視点からさらに具体的に特徴付けられる。興味深いことに近年の社会科学では、「科学の不統一性」の認識とは裏腹に、自然科学を含む隣接諸分野との連携が加速している。個

人の消費行動における認知バイアスを明らかにしようとする神経経済学 (neuro-economics) がこうした連携のひとつの例となろうが、神経科学の知見や概念は、認識論や倫理学における自然主義陣営の理論にもふんだんに見られることは周知の事実である。それゆえ社会科学の哲学は、哲学と科学は連続した営みの二つの側面であり、両者の境界はあったとしてもせいぜい曖昧なものでしかない、という主張として捉えられる哲学上の自然主義にとって、格好の活躍の場となる。また自然主義は、哲学的分析と科学の実際の営みとの間の生産的な対話と相互示唆を動機付ける。この点は、我々の社会生活上の諸問題に哲学が貢献しようという意味で、現代において社会科学の哲学が担う重要性を明確にしてきたのである。社会生活上の具体的問題との関わりは、他方で、社会科学を「価値と客観性 (values and objectivity)」の問題から切り離せないものとする。これが社会科学の哲学における新潮流を特徴付ける四つ目の視点である。例えば政策の妥当性は、予め立てられた政策目標に照らしてそれがどのような結果を生んだかという観点から判断されるべきだが、そもそもどのような政策目標を立てるかという問題は、社会の成員に共有されている価値と複雑に絡み合っている。この点に関して、「社会科学は（自然科学と同様）価値的判断に関して中立的であるべきだ」という主張が一方にあり、他方でそれとは対極の「社会学者は積極的に特定

の政治的プロジェクトにコミットすべきだ」という主張もなされてきた。本書で示される新しい潮流の特徴は、この両極端の中間の第三の道を行くという点にある。すなわち、この道を進む現代の論者らは、社会科学の研究において価値が不可避免的に重要な位置を占めることを認識しつつ、他方で社会科学理論が客観性を維持するべきで、することも真剣に考慮し、そのための方途を探るのである。

さて、本書が扱う七つのトピックを順に挙げると、第一部「価値と社会科学 (values and social sciences)」、第二部「因果推論と説明 (causal inference and explanations)」、第三部「解釈 (interpretation)」、第四部「合理性と選択 (rationality and choice)」、第五部「方法論的個人主義 (methodological individualism)」、第六部「規範、慣習、制度 (norms, conventions, and institutions)」、第七部「文化の進化 (cultural evolution)」となり、各部の冒頭には編者らによるイントロダクションも付されている。なお上記の編集意図に基づき、編者らは、次のような文献の選択基準を設けている。各トピックの下にはそれぞれ三編から五編の論文が収録されるが、そのうちの一つには、1960年代から70年代に発表された、当該トピックの現代的古典と見なされる論文が選ばれ、各部の先頭に置かれる。そしてそれに続く、主に1990年から2009年にかけて出版された数編の論文が、ときに古典的業績を批判的に

乗り越えようとし、ときに全く新たな視点を導入する様子を見ることによって、読者は先に述べた社会科学の哲学の新しい潮流を辿ることができるのである。こうした本書の特徴を垣間見るために、以下では最初の二つのトピックに関して、その古典的論文と、それに批判的立場をとる現代的業績のうち一編を取り上げ、手短な内容紹介も提示することにしよう。

第一部「価値と社会科学」で問題とされるのは、社会科学が我々の価値的・規範的判断とどのように関わるかという点である。社会科学ではその対象の特質からいって、研究者が自身の研究プロジェクトを選択するにあたり、純粋な知的関心以外の利害から自由である(*autonomy*)とは考えにくい。しかし Nagel (1961); *The value-oriented bias of social inquiry* は、「データから結論を導く科学者の推論に価値的判断は影響しない」(*impartiality*)、また「科学的研究の結果それ自体は何が正しく何が悪いかといった規範的含意を持たない」(*neutrality*)という二つの意味においては、社会科学も価値から自由(*value-free*)であると主張する。というのもこうした自由は、科学において近似的に成り立たしめるべき理想として機能することに意義があり、この点において自然科学と社会科学との間に本質的な差はないからである。たんに社会科学にはこの理想状態への近似が成り立ちにくい実際上の障害が多いに過ぎない、とネーゲルは言う。

これに対して Hacking(1995) の *The*

looping effects of human kinds は、社会科学と価値的判断との、抜き差しならない関係を指摘する。自然科学で対象となる *natural kinds*、例えばある化学物質を考えよう。科学者たちがその物質を発見し、命名し、研究結果を世間に広めたところで、そのことが当の化学物質の性質を変えてしまうことはない。しかし社会科学が扱う *human kinds*、例えば「児童虐待者」という概念はどうか。児童に対するある種の行為を我々が「虐待的」と見なし、そうした行為をする人々を社会学者が研究し始める。そのようにして明らかになった知見は、彼らに対する我々の見方、そして彼ら自身の自己認識を変える。するとその変化は彼らの行動を変え、それゆえ「児童虐待者」という種の意味内容自体が変化してくるのである。社会科学で扱う概念と我々の社会的行動との間に存するこうした循環的影響関係(*looping effect*)を、ハッキングは自然科学にはない社会科学の特質として指摘するのである。

第二部「因果推論と説明」の出発点となるのは、Hempel (1942)の *The function of general laws in history* だ。D-N モデルに基づくヘンペルの科学観では、科学的説明は普遍的法則と初期条件から現象を導くものと見なす。この論文で彼は、そうした科学観を社会科学（ここでは歴史学）に敷衍することを試み、歴史学と自然科学において、法則は非常に似通った機能を持つと主張する。これに対して Woodward (2000); *The Explanation and invariance in the special*

sciences は、科学的説明に関してさらにラディカルな見方の転換を提案する。ヘンペルの科学観では、科学的説明は法則に訴えたものでなければならず、一般化言明 (generalization) は純粋に法則的であるかさもなくば偶然的なものに過ぎないと想定されている。しかしほとんどの社会科学的説明の場合、それをうまく適用できない例外ケースが生じてくる。つまり「純粋に法則的」と言えるような社会科学的説明は滅多にない。それゆえヘンペル流の科学観が社会科学に適用されると、社会科学的説明は、真に法則的な科学的説明の「近似」や「部分的記述」、あるいは但し書き付きでのみ成立する未熟なものとして描かれることになる。ウッドワードはそのようなヘンペルの「科学的説明の法則定立的理解(nomothetic conception of explanation)」を見直そうと試みる。ウッドワードの提案の鍵概念となるのは「操作的介入(manipulative intervention)」と「不変性(invariance)」である。彼によれば、科学的説明に我々が期待するのは、我々が周囲の環境に対して何らかの働きかけ（すなわち操作的介入）を行ったときに、それが現象にどのような変化をもたらすかを、そうした説明が与えてくれることに存する。社会科学における仮説や理論もこうした情報を与えてくれるが、それらのほとんどはある特定の条件下でのみ有効である。すなわち社会科学の説明に現れるほとんどの一般化言明は、それを適用できない例外の存在を許し、それゆえヘンペルの意味で

の「法則」ではない。しかしウッドワードは、説明的一般化(explanatory generalization)を、それが法則的かどうかではなく、変数を様々に変化させたとき、その変数を含む一般化言明が成立し続ける(invariant)かどうか、という観点から特徴づける。この不変性という尺度は程度の差を許す。それゆえ我々は、社会科学における一般化言明を、普遍的法則と偶然的一般化のいわば中間に位置づけ、自然科学と社会科学それぞれにおける科学的説明を連続した一つの枠組みの下に理解することができるのである。

さて、本書は社会科学の哲学の新潮流を紹介することに主眼が置かれていることは既に述べたが、同時に入門書としての性格も手堅く備えている。例えば Geertz (1973); *Thick description: Towards an interpretive theory of culture* (第三部) が提示する議論は、社会科学の目的、あるいは科学としての地位を問い直す際の一つの出発点となろう。また Harsanyi, (1977); *Advances in the foundation of rational behavior* (第四部) は合理的意思決定理論の歴史的・論理的発展の簡潔かつ明晰な見取り図を与えてくれる。アドルノらの批判理論や、ミルやヒュームといった社会哲学の古典に対する注目がほぼ無いことを不満とする向きもあるかもしれないが、この点はそれらを中心に扱った類書が既にいくつもあるという理由から、本書では意図的に外されているに過ぎない。